

---

# 噂のげえむ

狂幻乱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

噂のげえむ

### 【Nコード】

N9836V

### 【作者名】

狂幻乱

### 【あらすじ】

4人は、そのゲームを始めるとその人は取り込まれるという噂のゲームを始めてしまった。そのゲームの中は古びた館だった………。

とある脱出ゲームと漫画とよんで思いつきました、残酷描写はあるかは、自分にもわかりません。

## 1 P L A Y (前書き)

途中から書き方が一人称から三人称に変わります

## 1 P L A Y

俺の名は靖晴<sup>やすはる</sup>、今は、金曜日の放課後だ。

「おい、待ってよー。」

「そんなこと言わなくても、待ってるよ。で、何の用?」

「明日、みんなで家に行っていていい?新しくゲーム、ダウンロードしたから。」

(明日か、何にも用事はないし、まあいっか。)

「うん、いいよ。」

「やったー!じゃあまた、明日、みんなで行くねー。」

「じゃあ、明日。」

次の日……………。

午後1時くらいに、みんなが来た。

「おじやましませーす!久しぶりだな、お前の家に入るの。」

俺の家に来たのは、稚夜<sup>ちよ</sup>、亮汰<sup>りょうた</sup>、舞苛<sup>まいか</sup>、の3人。

「そうだな、何年ぶりだ。お前等を家に入れるの。」

「私にはわからないよ、初めてなんだし。」

「あれ、そうだったけ?この前みんなで来なかつたけ?」

「私、半年前に転校してきたんだよ!行ってるわけないじゃん!」

「おい、今日来た理由は、なんなんだよ。いい加減教えるよ。」

「ふっふっふー、実はあの噂の呪いのゲームをダウンロードして持ってきたのだー!」

「え!嘘!まじで、あの遊んだらそのゲームに取り込まれるって噂の!」

「そう!みんなでやらない!」

(すごくいやだ……………。帰りたい、って、ここ俺の家……………)。

結局、みんな俺の部屋でそのゲームをやることになった。

「じゃあ、始めるよー。」

カチッ

「……………なーんだ、なんにも起こらない……………ってええ！ここ、どこ！」

俺たちは、気が付くとまったく知らない場所にいた。

「ん？どうかしたって、どこだここお！」

みんな、まったくどこかわからないところに来たので、吃驚していた。

「まったく、何処なんだ、ここ。」

「靖晴、お前も知らない所か。稚夜と舞苛は？」

「わからん。気が付いたらここにいたから。」

(なんなんだ、ここ。)

俺は、亮汰と一緒に館の中を探索することにした。

「いたたたたー、ん、ここはどこ……………？ねえ、舞苛、何処。」

「稚夜。ここにいるよー。ねえ、これ、なんだと思う？見えないからわかんないよー。」

「あつ、ちよつと待って、今ライター出すから。」

「早くしてよー、怖いんだから。」

ポウッ

「ひっ！なにこれ、ま、まさか、こっ、これって、し、死体！」

「え！嘘！死体！ふざけないでよ！こっつてなんなのよ、絶対靖晴の家じゃないでしょ！早く帰してよ、今日塾があるのに！」

「多分無理だと思うよ。」

「なんで？」

「この部屋から、外に出る扉はあるけど、まったく動かないんだよ、出られないよここからじゃ、だから、早く出る道探そうよ、もしかしたら、その途中で、靖晴や亮汰に会うかもしれないし。」

「そうだね、早くここから、出る道さがそう。」

「おー！」

舞苛と稚夜は館を探索することにした。

「なあ、亮汰。ここなんか暗くない？周りには灯籠みたいなのがぶら下がってるだけだし。」

「だな。懐中電灯ぐらい落ちてたらいいのにな。じゃあ、一つこれもらっていくか。」

亮汰はぶら下がっている灯籠を持ち上げた、すると。

ゴゴゴゴゴゴッ

「ん、なんか、動いたような音がしたぞ。何かわかるか、靖晴？」

「あ、ああ。多分あれだ。前の方で何か、動いたから、ちよつと見てくる。」

「気をつける、こんな仕掛けのある所だ、トラップが仕掛けられているかもしれない。」

「わかつてるつて、じゃあ行ってくる。」

靖晴は、仕掛けで動いた場所へ向かった。

「ねえ、これなんだと思う？」

「わかんない、とりあえずもっていこ。」

ガコッ

「何、今も音。ねえ舞苛、つて舞苛！何処！何処行つたの？ねえ舞苛〜！」

舞苛は仕掛けによつてできた穴へ落ちて消えて行つた。

稚夜は何も知らないまま舞苛を探しに館の中を進んでいった。

「やっぱり暗いな、ここ。早く行ってあいつの所に戻ろう。」

（長いな、この道。いったいどれだけあるんだ？）

「うわああああああ！！！！」

「どうした、亮汰！」

「と、突然、床に穴が開いて、そこから頭と下半身の無い人間が追いかけてきたんだ！」

「変な嘘言つな、怖がらせようとしても無駄だぞ。」

「嘘じゃねえ！早く逃げるぞ！」

「おいっ、引つ張るんじゃねえ！なんなんだいきなり！」

靖晴と亮汰は見えない道を走りぬけて行った。

「いた〜い！もう、いきなりなに！つてここはどこ……？」

（何も見えない、灯籠も見当たらないし、ライターはえーとあった。）

ポウッ

「ひっ！骨がいつぱいある！もういや、帰りたい、つて、あれは何？なにか光ってるけど、『2階の鍵』？なにこれ、一応持っついていこう。でも、どうやって出よう……。」

（ここから落ちてきた所しか光が見えないし、他の道はあるかなあ？）

舞苛は帰る道を探して明かりをつけて行った。

「舞苛ー！どこいったの！」

（突然消えた舞苛は消えちゃうし、靖晴や亮汰はまだ見つからないし、みんな何処行ったんだろう……）

「ここかなあ？もう、他に見つかりそうな所ないし。失礼します。」

ガシャアン

「ひゃあ！なにいきなり！」

「う、うとう、があっ！」

「きゃあ！何か来た！人……？つて頭が無いいいい！！いやああああああ！」

舞苛は何も見えない真っ暗な道を頭の無い人から逃げていくのであった。

このゲームに取り込まれた4人はどうなるのか、それは誰にもわか

らない……。

## 1 P L A Y (後書き)

何とか続けさせるつもりです。

## 2 P L A Y (前書き)

遅れました、すみません！

## 2 P L A Y

……… 我は、ここを支配するものなり。汝、ここに挑戦するのならば、仲間を信じ、誰も失うな、皆を守り、ここから出る道を探すがよい。………

「何だっただんだ今の……。」

「ん？どうしたんだ、靖晴？」

「いや、突然頭の中で声が聞こえたんだ。」

「ふーん、なんて言ったんだ？」

「えーっと、確か誰も失うなとか、そんな事言ってた。」

「と言う事は、ここはまったく別の場所になるな。早くこんな所から出ないと……。」

「で、どうする、これから。まだあいつ、いるだろ。ここに隠れるけど、どこに逃げるんだ？」

「さあ？まずは、あいつが遠くに行つて、そのあと、あいつが出てきた穴の方に行つてみるか。」

「そうだな、今はそれしか思い浮かばないし。」

靖晴と亮汰は、頭と下半身の無い人から、隠れながら、次にすることを決めていた。

「本当に何にも見えない……、ここから出れるのかなあ？」

（舞苛はどっか行つちゃうし、亮汰と靖晴は、見つからないし、みんなどこ行つただらう？）

「舞苛あゝ！何処言ったの？いたら、へんじしてー！」

ガシャァン

「うひいっ！なんだ……、ただの骨かあ、ってなんでこれを見て落ち着いてるのかしら……？」

（それにしても、ここ、なんにもないなあ……。周りは真っ暗だし、



(もしかしたら、さっきの所にいるかもしれないし。)

「で、どの道だっけ……、なんか道増えてるんだけど？まあ、何処でもいいかつ、早く帰ろーっと。」

稚夜はさっき来た道とまったく違う道を走って進んでいった。

「「うわああああああ」」

「あつ、この声、亮汰と靖晴だ、おーい！」

「逃げるぞー！」

「おうつー！」

「何から逃げてるのかあなあ？あつ、今ので何か、落ちてきた。梯子かな……って、スコップ！ここを掘れって事……、無理だよ、掘りきれる自信がない……。」「たぶん地下三階ぐらいの深さだよ、掘りきれる自信がない……。」「舞苛は、するこを見つけたが絶望に浸っていた。」

「まだ、追ってくる、どつか隠れる場所はねえのかよ！」

「それが無いんだなあ。結構探してるけど、いろんな部屋行って見ながら逃げてても、そんな所無かつたろ」

「じゃあ、倒すか！」

「どうやって、倒すんだ、あんな化け物！」

「うーん………素手？」

「無理に決まってるだろーが！」

「そうか？200人ぐらいいたらいけると思うんだが？」

「そんなに人いるかあ！いるのは、2人だけだぞ！どうやって増やすんだ！」

「もしかしたら、あの2人も来てるかもしれないよ？」

「それでも、4人だろーが！」

「あ、そだね、足んないね。他に誰か呼ぶ？」

「呼べたら、呼んでるわああー！」

「じゃあ、武器探す？」

「もう、それしかないの……。」

靖晴と亮汰はゾンビに追いかけられながら、馬鹿なことしていた。

ガスっガスっ

「結構掘つてるとは思っただけど、まったく進まない……、やつぱりこれが出るなんて無理なんだよ……、」

ガイーンッ

「ん？なんか、あたたたぞ、やった！宝箱っぽいものだ、あーけよっ！」  
「がちゃ、」

「なにか書いてある、なんだろう？」かなときむわやんどれまなぬかないにきりぢつすよてせれちもないになびすよをあすおやえぢぢすさなともぬひぼてなだえげふてやえぢ、ぢろきぬちなんととてぢつとまりお。ヒント』……なんだこれ？意味がまったく分からない、まずこれ日本語……？」

舞苛は、手に入れたものをじつと見つめていた。

「あれ、こんな道通ったっけ……？まあいつか！」  
カチッ

「ん？何の音、これもしかしてなにかいらなことしたっぽい？やつぱり下穴あいてたああああああ……」。」「  
稚夜は、トラップに掛かり、穴の中に落ちていった。

このゲームに取り込まれた4人はどうなるのか、それは誰にもわからない……。

## 2 P L A Y (後書き)

多分、暗号ミスってると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9836v/>

---

噂のげえむ

2011年9月16日03時31分発行